



## 子どもの声なき声を聴く

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

次の文章は、数年前に道教委が主催したある協議会において、道央の小学校の校長先生が自校の学力向上の取組について、実践発表したときの資料の一部です。まずは御一読ください。



子どもたちはランドセルに漫画本やゲーム機を詰めて学校に通っているわけではない。あの中には、教科書と教材とノートが詰まっているのだ。子どもたちは勉強が分かりたい、できるようになりたいと願って学校に来ているのだ。それが毎時間、毎時間分らないことの連続だったらどうだろうか。れでも多くの子どもは、あの堅い椅子に座って健気に耐えているのだ。一日の最後、「今日も分からなかったな」と思いながら、重いランドセルを背負ってとぼとぼ家路につく子どもたちの後ろ姿をイメージしてみしてほしい。



兵庫教育大学名誉教授の梶田叡一氏は、「教育における不易流行とは何か」について語る中で、次のように述べています。



学校教育ということでもまさに「千歳不易」なのは、「学校は子どもが勉強して賢くなるための社会的装置である」という基本的性格であろう。時代の古今を問わず、洋の東西を問わず、学校は常にそのような存在であったはずである。学校は子どもが遊びに行くところでもなかったし、身体を鍛えに行くところでもなかったし、親が安心する形で子どもを預けるところでもなかった。

本校は今年度の重点教育目標として「自分のよさに気付き、役立つ喜びを知り、未来社会で活躍できる子ども」を掲げ、その実現に向け各種取組を推進しています。学校という「勉強して賢くなるため」の場所で、「分からない」、「できない」が続くとしたら、子どもたちは、自分のよさに気付くことも、役に立つ喜びも知ることができません。そして、未来社会で活躍することもできないと考えます。私たちはこのことにもっと自覚的である必要があります。子どもたちの声なき声を聴く想像力を高めていかなければならないと思います。

現在、本校では先月実施された全国学力・学習状況調査の問題を、全ての教職員が解き、それぞれの視点で感じたことを持ち寄り、11日の校内研修の折に、本校としての授業改善策を決定し、全ての教科等の授業において実行していこうとしています。子どもたちが「分かった」、「できた」を実感して家路につくように。